

沢例会 γ チーム 報告

日程：2017/7/30(日) 天候 晴れ

山城：積丹山塊 大滝川→積丹岳→夏道

メンバー：L 秋〇、K 澤、Y 城

日程

5:20 最終車止め 貯水施設より林道歩き

5:38 Co 187m 堤防？より入溪

6:24 Co 326m F1

7:44 Co 395m F2

8:50 Co 485m F5

13:18 Co 1251m 積丹岳頂上

15:27 Co415m 積丹岳休憩小屋到着

今年度の沢例会は小規模のものとなったが、例会という名の下にあえての前泊で休憩小屋前で宴会からの開催となった。

いつのまにか、会の中心的支柱となったファミキャン部を代表して Y 成氏が My テーブルクロスと My コンロで料理を飾る。料理はもちろん、焼き肉で、直前に南小樽市場で買い出しをした一級品。

夜は盛り上がり、K 澤氏の白いギターはお披露目する機会がないまま夜は更けた。

翌朝は早すぎるという意見もありながら、3 時 30 分には起床し、小屋で朝食をいただく。

K 山氏は腱板断裂術後のため尾根歩き班として単独行動ではあったが、β チーム、γ チームを最終車止めまで送ってくれたため、当初予定していた、到着地点である休憩小屋と、入溪地点である車止めに 2 台の車を残置する手間が省けた。

大滝川は最終車止めは貯水施設裏としたが、無理に入れば入溪地点までは車で行けそうだ。

入溪は堤防というには物足りない感じのする副道のような所であり、しばらくはゴロタ歩きとなる。

入溪より 45 分程度で F1 に到着。報告では F1 が核心とされており、あまりに速い展開に気持ちの盛り上がるタイミングを失う。25m 程度の直爆であり右岸の草付きからのルンゼを登る。アイゼンが必要な斜面ではないが、明瞭なアンカーがとれるわけではないので悪天はやや大変かもしれない。ルンゼは徐々に細くなり、地面から 4m 程度頭上にテーブルの様に鎮座するチョックストーンとなる。古いアンカーがあるが、側壁を使いな

がらじりじりと登ればロープを出す必要はない。せっかくなので新人の Y 城くんに初リードをしてもらうことに。「どうする Y 城くん？」

「行ってみます！！」なんと頼もしい。私と K 澤氏は自確をとった上でスポッターとなる。直後、「ばいいーん！！」落ちました。スリップ程度なので事なきを得ましたが、結局ロープ確保に切り替え、再トライとなりました。

その後、小滝がいくつかあり、沢らしい溪相。F2 は釜持ちスラブで苔むした右岸を歩く。積丹といえばヌルヌル滑る沢のイメージであったが、許容範囲内のぬめり具合。

F3,4 もあるが、写真とり忘れたため割愛。F5 は階段状の滝であるが結構な高さがある。結局、すべての滝は新人 Y 城くんがリードをして確保してくれる。安全性を期してロープは計 2 回出動となった。

徐々に滝もなくなり、原頭感が近づいてくる。Co 700m は右股をとると、Co 760m 程度で距離 60m 以上あろうかと思われる赤い岩盤スラブが出現する。悲しいことに倒木と落石により、単なる歩きづらい岩盤であるが、堆積物がなければこの沢 1 番の名所となるだろう。

Co1000 程度から沢形状はほぼなくなり、藪漕ぎ開始。



F1 と虹



F5

12 時にお隣の伊佐内川チームや尾根歩きチーム、遠くは珊内岳チームと無線交信する計画であったが、Co1000 程度の尾根にいても、まったく無線交信はつながらなかった。ちなみに、伊佐内と休憩小屋間では交信できたそう。

藪漕ぎは計 45 分の根曲がり対決。本州育ちの新人は無言で戦っていたが、心境を聞いてみると、非常に腹が立つとのこと。このあたりで王者 K 澤氏の体力限界となり、どんどん遅れていく。

なんとか声かけしながら頂上にたどり着くと、伊佐内チームと同着の頂上であった。

1 時間ほど休憩した後、おのおの休憩小屋に下るが、これまた長い。1 時間 30 分ほど下山に要した。



藪の中



F6 とお説教

